

美術

「想像」と「創造」の往還を通して、 見方や考え方、感じ方を深める授業

「ただの石ころ」が「特別な石ころ」に変わることってありませんか？

それは自身の眼差しの変化によって意味や価値が際立つ瞬間があるからです。

AIの進化や予測不能な社会の変化が加速する今だからこそ、人間にしかできない「感じる」「つくる」は、これからの時代の力になります。

これこそ「美術」で培う力です。



県中教研 美術部 全県部長
胎内市立築地中学校

校長 稲生 一徳

見方や考え方、感じ方を深める「表現と鑑賞の一体化」

現行の学習指導要領に、「見方や考え方」に加えて「感じ方」が示されている教科は、美術のみです。また、〔共通事項〕に基づくと育むべき資質・能力も明快に説明できます。

松縄先生（大崎学園）のICTを活用した授業、石川先生（猿橋中）の伝統の技を学ぶ授業ともに、生徒がよさや美しさに「気付く」「感じる」「伝える」ことが豊かにできるよう

に学びの技法を手立てとした授業を公開します。

大泉義一（早稲田大学教授）はデザイン思考のプロセスを「発散→収斂→発散→収斂・・・」としています。発散を「表現」、収斂を「鑑賞（言語活動）」と置換し考えると、表現と鑑賞の一体化は、探究的な学習の入口ともいえます。

美術科における「深い学びにいたる授業」のイメージ

自分の内面にある感情や考え、心を見つめ、表現と鑑賞を往還しながら、見方や考え方、感じ方を深め、新たな表現・鑑賞へとつなげていく。



見方や考え方、感じ方を深める「主題の明確化」

生徒が自らの感情に向き合い、感性を豊かに働かせながら価値を見いだした「様々な感情をカタチに表そう」という実践を紹介します。

自身の内面にある感情の複雑さを捉え、形や色彩、粘土の質感や量感などから、言葉だけでは表現することが難しい繊細で複

雑な感情に向き合いながら、立体作品で表現しました。

鑑賞では、見る位置によって形や色彩の見え方が変わること、印象（感じ方）が変わることに気付かせ、複雑な感情の変化や揺れなどを表現に結び付けた力のある実践でした。



見方や考え方、感じ方を支える「概念」

生徒が考えを深めていくための軸となる概念として「見方」を示し、「漆」のよさや美しさを感じ取りながら、見方や感じ方を深めていく実践を紹介します。

英訳でJapanとの呼称もある「漆」のイメージを生徒に尋ねると「伝統文化として継承すべきもの」「高価な漆器」など、身近なものではありません。また、「蒔絵」や「螺鈿」を知識として得たとしても生徒に「漆」のよさや美しさを実感させることは難しいものです。

手立て1：触れて感じる

比較して鑑賞する

手立て2：漆を知る（動画の活用）

「漆の価値」について考える

手立て3：見方・考え方の変容から考える

「漆の価値」の実感

「これからの私たちの生活に「漆」を生かすなら、どんな場面や作品が考えられますか」と問うことで、漆の魅力と自分の生活との関わりを生徒は考えます。「スマホケースとして使いたい」という現代的な声（見方）もありました。



美術 重点方針

「美術を通して、豊かな生き方やコミュニケーションができる生徒の育成」

○ 形や色彩など造形的な美しさを表現したり、鑑賞したりする授業を通して、お互いの見方や感じ方を深める生徒を育てる。

美術 <中越地区／三条市中教研>

11月13日(金) 研究会開催

研究主題：ICTを活用し、仲間と検討する活動を通して、
作品を練り上げる能力を育成する授業

題 材 名：「7年：三条かつてに応援団
～文様バッグを作ろう～」

会 場 校：三条市立大崎学園

公 開：1学級

授 業 者：松縄 舞

指 導 者：新潟大学教育学部 准教授 永吉 秀司 様
新潟市立光晴中学校 校長 渡邊 敏尚 様



研究推進責任者
三条市立第三中学校
兄玉 季恵



教科・領域担当者
三条市立大崎学園
松縄 舞

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

既習事項を手掛かりに、思いが伝わるデザインになるように、仲間と意見交流し、作品を練り上げる姿を目指します。また、プレゼンテーションソフトを活用し、モチーフの配色や配置の異なるデザイン案を数パターン持ち寄り話し合うことで、美的感覚を相互に働かせ、さらに洗練した文様装飾になるよう、地域（社会）との関わりなどを意識させ、総合的に追求し、創造的に表します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

既習学習から、課題を醸成し、生徒自ら考えたいような課題を設定する。

教科横断した既習事項から課題を見いだすことで、生徒の課題解決の意欲を高めます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.15・16）

話し合う手立てとして、生徒が思考を深めるための工夫をする。

テーマ（主題）を明確にするためのワークシートや、ICTを活用することで、話し合う場面で自分の意見を述べ、積極的に話し合う環境を整えます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

より思いが伝わるデザインになるよう仲間と練り上げる活動をする活動を組織する。

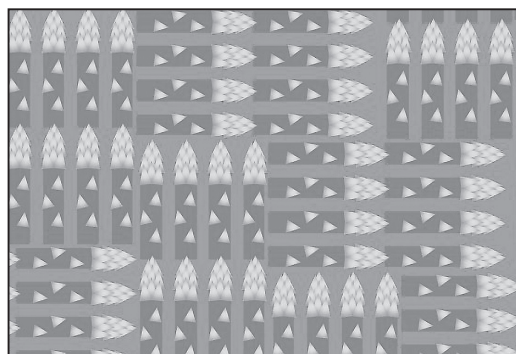
デザインを客観的に観ることで、新たな気づきを得て、よりテーマや思いが伝わるデザインになるように再考します。

題材の様子

本題材は、「三条市」から連想される場所や物、そこから感じ取ったことを主題として設定し、文様（連続模様）を制作します。

美術科の既習事項（文様）と総合的な学習の時間の既習事項（地域学習）を関連付けて、地域を応援する文様のデザインを課題として設定します。

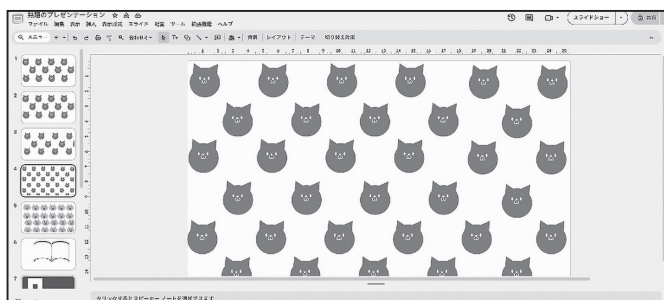
ポイント1



▲教師が作成したサンプル

プレゼンテーションソフトのスライドを増やせる機能を活用し、色や形、配置の異なるデザイン案を複数用意させます。

これにより、デザインを安易に決めるのではなく、複数のデザインを比較し、より主題に合ったデザインになるよう検討しやすくなります。また、話し合う際に、デザインを可視化しておくことで、苦手な生徒も話すきっかけになるよう促すことができます。



▲Google スライドでの制作の様子

ポイント2

本題材では、完成した作品（文様）を実際に三条市内の店舗でバッグとして使用していただく予定です。そのため、自分だけが納得するデザインではなく、誰が見ても意図が伝わるデザインである必要があります。話し合い活動により、第三者から見たらどう映るのかを確認し、より主題に迫る作品になるよう仲間とともに練り上げを行います。それにより、デザインの客観性が向上し、より洗練された作品の制作につながります。

ポイント3



▲昨年度プレ授業の様子

研究会

プレゼンテーションソフトで制作したデザイン案を持ち寄り、「色・形・配置」の観点から、伝えたい主題が最も伝わるデザインとは何かを仲間とともに練り上げる授業をご覧ください。

ポイント2・3

▼昨年度プレ授業の様子（協議会）



協議会会場では、研究推進委員の実践発表も予定しています。公開授業・協議会・実践発表を経て、明日の授業の活力になるような研究発表会になるようにします。

美術 <下越地区／新発田市中教研>

11月19日(木) 研究会開催

研究主題：人との関わりを通して、考えを深めさせる指導の工夫
～対話を通して、造形的な見方・考え方を深める授業～
題 材 名：「2年：地域の職人から学ぼう～和菓子から
学ぶ造形美～」
～デザイン・塑造・鑑賞～

会 場 校：新発田市立猿橋中学校

公 開：1学級

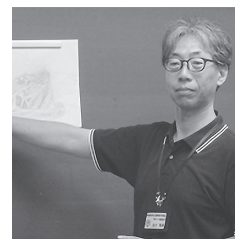
授 業 者：石川 雅英

指 導 者：新潟県教育庁義務教育課指導第2係

指導主事 高橋 淳一 様



研究推進責任者
新発田市立本丸中学校
石井 彩子



教科・領域担当者
新発田市立猿橋中学校
石川 雅英

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

地域の老舗和菓子職人から学んだ「和菓子」の繊細な造形美や、五感に訴えた季節感を樹脂粘土で表現します。また、班で完成作品を深く鑑賞します。本題材の学習を通して、「仲間の制作意図や表現の工夫を、自分の美術観として受け入れることができるか」「新たな美術観を自分の言葉やデザインで表現しているか」という視点から、自分が制作する作品の主題を明確にし、感性豊かに表現できる生徒を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

学んだ知識や技能を活用し、季節や主題のよさが伝わるように造形の要素を意識した和菓子のデザインを考える。

これにより、見る人に季節感や思いが伝わるよう、形や色を組み合わせた、独自のデザインを考えようとします。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

四季や主題から受けたイメージをどのように表現すると相手に伝わるかを話し合う活動を設定する。

これにより、対象を様々な見方や感じ方から捉え直し、表現や鑑賞の視点を広げ、構想を練り上げます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.17）

鑑賞活動を通じて、新たな美術観や表現方法を受け入れ、次の作品制作に生かそうとする。

これにより、作品を多面的・客観的に思考し、よさだけでなく改善点にも根拠をもつことができます。

単元（題材）の様子

「和菓子は五感の総合芸術である」「地域の歴史や文化」「和菓子の特徴」について授業に取り入れていきます。

見る人に季節感や思いが伝わるように、形や色の組み合わせ、模様や大きさを工夫し、自分らしい和菓子をデザインできるようにすることで、美術文化の継承と創造について考えさせます。

ポイント1

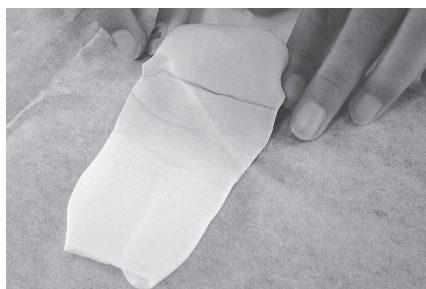


菓子職人の講演会で「和菓子」の特徴を学ぶことにより、「四季や主題をどのように表せばよいか」「なぜその形・色・模様を選んだのか」と自分のデザインについて理由や根拠を示しながら説明することができます。さらに対話活動を通して、アイデアや作品を比較・検討してよりよい表現につなげる力を育んでいきます。

ポイント2



作品や資料をよく見て、ただ真似るだけでなく、よさや課題を見極め、その理由を考えられるよう、既製の和菓子や試作品、生徒同士の作品を深く、鑑賞していきます。そ



して、参考にする点と自分なりに工夫する点を整理し、四季や主題が伝わるオリジナルの和菓子を樹脂粘土で表現できるよう促します。

ポイント3



研究会

前次に老舗菓子職人の講話を聞き、四季の和菓子や「菓銘」について学びました。研究会当日では、班ごとに、



意見交換をしながら四季と主題を決定し、各自紙面にデザインを描いたり、樹脂粘土で表現したりする活動を行います。

既習事項の活用と対話を通じて、試行錯誤しながら、制作に取り組む生徒の姿をご覧ください。



ポイント1・2・3